

# 深山の秋

小川未明

青空文庫



秋も末のことでありました。年老つたさるが岩の上うえにうずくま  
 っつて、ぼんやりと空をながめていました。なにかしらこころ心に悲し  
 いものを感じたからでありましょう。夏のころは、あのようにい  
 きいきとしていた木の葉が、もうみんな枯れかかっています、やが  
 ては、自分たちの身の上にもやってくるであろう、永い眠りを考  
 えたのかもしれない。たとえば、はつきりと頭に考えなくとも、一  
 時にせよ、その予感に囚えられたのかもしれない。いつになく、  
 遠い静かな気持ちで、彼は、雲のゆくのをじつと見守っています  
 た。

夕日は、重なり合つた、高い山のかなたに沈んだのであります。

さんらんとして、百花かの咲きさ乱みだれている、そして、いつも平和へいわな  
楽土らくどが、そこにはあるもののごとく思おもわれました。いましも、サ  
フランの花はなびらのように、また石竹せきちくの花はなのように、美うつくしく散ちつ  
た雲くもを見みながら、哀あわれな老おいざるは、しかし、自分じぶんのちいきな頭あたまの  
働はたらきより以いじよう上うのことは考かんがえることができませんでした。

「あの先さきにいくのは、山やまにすんでいるおおかみくんに似にているな。  
そういえば、つぎにいくのは、あの大きおおいくまくんか、その後あとか  
ら、旗はたを持もっていくのは、いつか森もりであつたきつねくんによく似に  
ている。」

そう思おもつて、雲くもの姿すがたをながめてみると、自分じぶんの知しるかぎりの山やま  
にすむ獣物けものも、小鳥こどりも、みんな空そらの雲くもの一つ一つに見みることがで

きるのでありました。それらは、たの楽しく、なか仲よくして、かみ神さまの  
前まえに遊あそんでいました。

彼かれは、この不思議ふしぎな有あり様さまを、岩いわの上うえでじつと見み上あげていまし  
た。

「ああわかった。わたしとしと私も年としを老とつたから、せめて達たつしや者のうちに、  
一ど度、みんなとこうして遊あそんでみよと、神かみさまがおつしやるにち  
がいない。」

こう思おもいつくと、老おいざるは、悲かなしそうに一ひとこえ声たか高く、友ともだち  
を呼よび集あつめるべく、空そらに向むかって叫さけんだのです。

いつしか、空そらの雲くもは、どこへか姿すがたを消けしてしまいました。もし、  
気きがつかなくなったら、永えい遠えんに知しられずにしまったような、それ

は、はかない天の暗示でありました。

老いざるの叫び声をききつけて、すぐにやってきたのは、近くのくるみの木に上つていたりすであります。

「どうしたのですか、さるさん、なにか変わったことでも起こつたのですか？」と、ききました。

この年老つたさるは、この近傍の山や、森にすむ、獣物や、鳥たちから尊敬されていました。それは、この山の生活に対して、多くの経験を持つていたためです。

老いざるは、まず、りすに向かつて、いましがた見た雲の教訓を物語りました。

「それは、すてきだった。みんな集まって、雪の降らないうちに

仲なかよく遊あそんだらいいと神かみさまはおつしやるのだ。」と、老おいざるは、諭さとすようにいいました。

「ほんとうに、いいことですが、平常ふだわたし私わたしたちをばかにしているくまや、おおかみさんが、なんといいいますかしらん。」と、りすは、小ちいさな頭あたまかたむを傾かたむけました。

「私わたしが、いまここで見たみ、雲くもの話はなしをすれば、いやとはいわないだろう。」と、老おいざるが、答こたえました。

「じゃ、さるさん、早はやく、懇こんしんかい親ひら会かいを開ひらいてください。私わたしが、小ちいさいのでばかにされなければ、こんなうれしいことはありません。」と、りすは、喜よろこんで飛とび上あがりました。

そこへ、のっそりときつねがやってきました。

「さるさん、なにか変わったことがあったのですか。あなたの呼び声をきいて、びっくりしてやってきました。」と、ずるそうな顔つきをしたきつねがいました。しかし、このときだけは、きつねもまじめだったのです。

老いざるは、いま見た雲の話をしました。

「きつねさん、あなたは、旗を持って、その行列の中に入っていましたよ。私たちがやるときにも、どうかあのようにしてください。」

これをきくと、きつねは、そり身になつて、

「あ、私も、ここにいて、その雲を見るのだつた。いままで、竹やぶの中で、眠ってしまいました。あなたの声をききつけて、び

つくりして目をさましたのです。「といいました。

老いぎるは、ふたりに、使いを頼みました。きつねは、洞穴

にいるくまのところへ、そして、りすは、谷川のところで獲物を待つているであろうおおかみのところへいくことにしました。

りすは、いきがけに、老いぎるを振り向きながら、

「ぶどうは、すこし過ぎたが、まだいいのがあります。かきもなつているところを知っていますし、くりや、どんぐりや、山なしの実など、まだ探せばありますから、かならずいい宴会ができますませ。なんといいつても、これから、長い冬に入るのだから、うんと一日みんなで仲よく遊びましょうよ。だいいち、この山にすむものの好みですから、おそらく不賛成のものはありますまい

。「といいました。

同じく、異ちがつた道みちの方ほうへいきかけたきつねは、

「そうとも、たとえ人にんげん間かんほどに道理どうりがわからなくとも、俺おれたちにだって義理ぎりはあるからな。」といいました。

「人にんげん間の義理ぎりなんて、あてになるもんじやないよ。」と、りすが、小ちいさな頭あたまを振ふりました。

「そんなことはない。」と、きつねは、人にんげん間の弁護べんごをしました。

「じゃ、律義りちぎもののかまや、勇敢ゆうかんなおおかみが、人にんげん間かんを助たすけ

たことはあるが、人にんげん間は、どうだ、くまや、おおかみを見みつけ

たが最後殺さいごころしてしまುದらう。」と、やつきになつて、りすがい

張はりました。

すると、老いぎるは、笑いながら、

「こんどは、人間ともお友だちになろうさ。」といいました。

「そういうさるさんだつて、人間からは、さる智恵といつて、けつして、よくはいわれていませんぜ。」と、りすがいうと、さすがのさるもきまりの悪そうな顔つきをしました。

「そんな話はどうかだつていい。まあ、早くいつてこよう。」と、きつねがいったので、りすは、一飛びに谷の方へ駆けていきました。

峠の上には、一軒の茶屋がありました。夏から秋にかけて、この峻しい山道を歩いて、山を越して、他国へゆく旅人があつたからですが、もう秋もふけたので、この数日間というものま

つたく人の影を見なかつたのであります。

茶屋の主人は、家族のものをみんな山から下ろしてしまつて、自分だけが残り、あとかたづけをしてから山をおりようとしていました。雪が見えて、また来年ともなつて、木々のこずえに新しい緑が萌し、小鳥のさえずるころにならなければ、ここへ上がつてくる用事もなかつたのでした。彼は、費い残りのしようゆや、みそや、酒や、お菓子などの始末もつけなければならぬと思つていました。

「また、きょうも人の顔を見なかつたな。」

そのとき、障子の破れ目から吹き込んだ風は、急に寒くなつて身に浸み入るのを覚えたのでした。

「どこか、近くちかの山やまへ雪ゆきがやってきたな。」と、主人しゅじんは、思おもいました。そして、明日あすの朝あさにでも、外そとへ出でて、あちらの山やまを見みたら、白しろくなっているであろうと、その山やまの姿すがたを目めに想そう像ぞうしたのでした。音おとひとつししない、寂せき然ぜんとしたへやのうちですわつていと、ブ、ブーツという障しょう子じの破やぶれを鳴ならす風かぜの音おとだけが、きこえていました。

「去年きよねんも、この月つき半なかばに山やまを下おりたのだが、今年ことしは、いつもより冬ふゆが早はやいらしい。」と、主人しゅじんは、立たつて、窓まどの障しょう子じを開あけて、裏うら山やまの方ほうをながめました。

夕日ゆうひは、もう沈しずんでしまつて、怖おそろしい灰はい色いろの雲くもが、嶺みねの頂たけからのぞいていました。このとき、キイー、キイーとさるのなき

声こゑがしたので、彼かれは、雪ゆきが降ふつて、山奥やまおくからさるがで出てきたの  
 を知しりました。そして、まだ鉄砲てつぽうの手入ていれをしておかなかつた  
 のを、迂濶うかつであつたと氣きづいたので。その翌よくじつ日ひる、昼ひるすぎごろ  
 のこと、入いり口ぐちへなにかきたけはいがしたので、見みると怪物かいぶつが  
 顔かおを突つき出だしていました。主人しゅじんは、びつくりして、声こゑも立たてら  
 れずにしりもちをつきました。なぜなら、意外いがいにも大おおきなくまだ  
 つたからです。

彼かれは、もう命いのちがないものと思おもい、体からだじゅうの血ちが凍こおつてしま  
 いました。

「どうぞ、お助たすけください。」と、心こころの中なかで、ひたすら神かみを念ねん  
 じたのでした。

けれど、くまは、すぐに飛びかかつてはこなかつた。かえつて、なにか訴えるような目つきをして、手にはかきの木とまたたびのつるを握っていました。そして、いよいよくまが、彼に危害を加えるためにやってきたのではないことがわかると、

「命さえ助けてくれたら、なんでもきいてやるが。」と、おそるおそる顔を上げて、彼は、くまのすることを見たのでありました。くまは、さも同意を求めるように、ただちに、酒だるの前にきて、じつとそれに見入っていたのです。

「ははあ、酒がほしくて、やってきたのか。」と、主人は悟りました。

「もし、俺が、酒をやらなければ、くまは、きつと怒つて、俺を

かみ殺すにちがいない。どのみち敵だ！ いつそたくさん酒を飲

ませて、酔いつぶしてから、やつつけてしまおうか？」

主人の頭の中には、この瞬間、すさまじい速度で、

さまざまな考えが回転しました。

「ばかな、この大きなくまに思う存分、酒を飲ませるなんて、

そんな酒がどこにあるか。神さまは、この瀬戸際で、俺が、どれ

ほどの智者であるか、おためしなされたのだ。まず、この高い

酒をやらぬ工夫をしなければならぬ。」

彼は、もうすっかり打算的になっていました。たなの上から

徳利を下ろして、奥へ持つてはいると、やがてもどつてきてたる

の酒をうつすようすをして、徳利を振つてみせました。酒が、チ

ヨロ、チヨロと音をたてて鳴りました。くまは、信ずるもののように、おとなしくしていましたが、やがて持つてきた、かきとまたたびをそこへ捨てる、徳利を抱えるようにして、まるまる肥ったからだで、前の山道を後をも見ずに、駆けて去りました。

長年山に住んでいて、獣物にも情けがあり、また礼儀のあることを聞いていた主人は、くまが、酒を買いにきたのだということだけはわかったのです。

「なにか、山の中で、獣物たちの催しでもあるのかも知れない。」と、思いました。

それよりか、自分が、損をせずに、うまく危険から脱れたことを喜んだのでありました。

「ながやま長く山にいと、ろくなことはない。はやむらお早く村に下りよう。」と、  
 しゅじん主人は、かんが考えました。

この日、やまのけもの山の獣物たちは、おいぎるのしきししたが、ぎょうれつ行の列をととの整えて、みね嶺から嶺へとね練つてある歩きました。せんとう先頭には、かわい

らしいうさぎが、つぎにおおかみが、そして、とくり徳利を持つたくま

が、きつねが、りすが、というじゅんじよ順序に、ちようど、さるが、

いわうえ岩の上でみ見た、てんじよう天上の行列そのままであつたのです。こ

とににんげん人間が、あしあと足跡を絶つてから、まったくせいじよう清浄となつた

さんちゆう山中で、かれ彼らは、あわただしく暮れていく、うつく美しい秋を心か

らお惜しむごとく、いちたの一日を楽しくあそ遊んだのであります。やがて、

かれ彼らの列れつがあるたか高いひろば広場に達したときに、かつててんじよう天上の神かみが

々たちよりほかには知られていなかた芸当をして、打ち興じたことでありましよう。

そのころ、峠の茶屋の主人は、そそくさと山を降りる仕度をしていました。酒だるの上には、くまが置いていった、かきや、またたびまで載せてありました。村へ帰つてからの、自慢話にするのでしよう。そして、もう来年の夏、客があるまでは、この小舎にも用がないといわぬばかりに、閉めきつた戸の一つ一つに、ガン、ガンとくぎを打ちつけていました。彼は、金鎚をふり上げながら、

「酢に水を割つて入れてやったが、獣物たちは、酒の味がわかるまいから、たぶん人間は、こんなものを飲んでいとおも

であろう。それとも酒さけでないと悟さとるだろうか？」

山やまは静しずかであり、木き々の紅こう葉ようはこのうえもなく美うつくしかったが、

ひとり彼かれはなにか心こころにおちつかないものを感じかんじたのでした。峠とうげを降お

りかけると、ざわざわといつて、そばの竹たけやぶが鳴なったので、く

まが、復ふく讐しゆうにやつてきたかと足あしがすくんでしまった。しかし、

それは、西にし風かぜであつて、高たかい嶺みねを滑すべった夕ゆう日は、雪ゆきをはらんで

黒くろ雲くものうず巻まく中なかに落おちかかつていたのです。

## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「真理」

1935（昭和10）年12月

※表題は底本では、「深山《しんざん》の秋《あき》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 深山の秋

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>